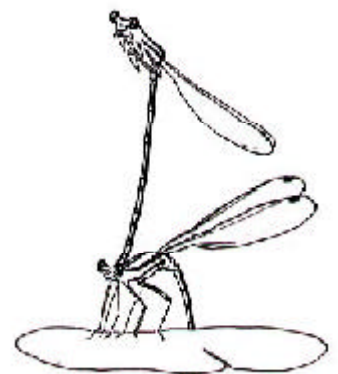


身近な自然

No. 5
夏号



パンフレットに掲載した
写真はぜんぶで97枚。
印刷屋さんにも多大なご
協力をいただきました。



「大切にしたい！身近な自然

～金沢近郊編～」パンフレット完成

全労済より助成金30万円を得て、昨年9月から制作をすすめていたパンフレットが5月に完成しました。このパンフレットは、見失われがちな身近な自然にスポットを当て、地域の自然の保全に役立てられることを目的としています。制作にむけての会議を3回開いたなかで、1)身近な自然とは何なのかを伝える、2)むかしから人の生活の身近にあった自然がいつの間にか失われており、そういった自然を紹介する、3)ビオトープという言葉が「つくられた自然」という意味でとらえられている面があり、ビオトープの示す大きな概念を教える、4)保全区域やひろく紹介されている自然より見失われている自然をとりあげる、5)希少な生きものの生息場所など乱獲の危険を生じさせるような情報は提供しない、など具体的な主旨、中身や構成が吟味されました。

会議と現地調査においてのみなさまのご協力、会員のみなさまにお寄せいただいた身近な自然情報により、目的に添うかたちのパンフレットを完成するに至りました。完成後、ひろく大勢の方に活用していただけるよう配布をすすめています。配布には会員の方々や行政の方々に積極的なご協力をいただき、これまでに個人・団体777冊(会員含める)、行政関連部課490冊、施設に244冊、学校に268冊をお渡しいたしました。このほか新聞やHPをみてくださった33名の方からご希望いただきました。

今回のパンフレットでは県内の金沢近郊に絞って紹介しましたが、今後能登地方や、加賀地方についてもこのような身近な自然の現状にふれたパンフレットの制作をすすめていく予定です。交流会へのご参加、またパンフレットの配布のご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

(交流会事務局 川原奈苗)



去る5月10日(土)に、金沢市こなん水辺公園管理学習棟において、加賀地域の身近な自然の現状と保全をテーマに当会主催のシンポジウムを開催致しました。パネリストには加賀地域の身近な自然に詳しい4人の方にご参加頂き、実際にフィールドで調査された結果や、身近な自然の問題点などを発表して頂きました。以下にその発表内容を掲載します。



加藤明宏さん(金沢ホテルの会)

「南加賀地域の里山について」

ヘイケホテルは、南加賀では谷地田をはじめ、里山近くの田圃にまだかなりの数が生息している。しかし、平野部では20年ほど前にカドミ汚染があって以来、現在ではほとんど見ることは困難になった。ゲンジボタルは、宇谷川、那谷川、日用川においては、県内でも指折りのゲンジボタルの生息環境が保全されている。しかし、橋の付け替えや道路の拡幅などに伴ってホテルの生息環境が危ぶまれており、自治体とも協議を行ったりしているが、まだホテルの生息環境などに対する環境認識が乏しいのが現状である。

また小松の「いこいの森」で、地元の小学生とともにカブトムシとギフチョウのピオトープづくりに取り組んでいる。ギフチョウの生息環境整備については、小松バイパスができる際に生育していたカンアオイをとってきて、周りの木にじゃまされないように鉢にカンアオイを植えている。今年は270鉢に800ほどのギフチョウの卵が産み付けられているので、ギフチョウの生息数は増えていると思われる。またカブトムシの環境整備は、ホダ木を積むことで、カブトムシの産卵場所を作っており、毎年7～800匹は発生していると思われる。

その他、学校ピオトープの指導などを行っている。学校ピオトープでは移入種を導入しようとしたり、ハバチの発生に対して殺虫剤の検討を行ったりと、ピオトープに対する理解がなかなかされていないのが現状であり、学校におけるピオトープの管理のあり方を指導するのが非常に難しい現状にある。

本間勝美さん(森の都愛鳥会)

「金沢市近郊のため池について」

森の都愛鳥会では、平成11年から3年間かけてため池、沼の自然環境調査を行った。調査を行ったきっかけは、ため池が老朽化でコンクリートやゴムシートに変わっていくのを見、ほ場整備が進む中、唯一生き物の生息場所であるため池もなくなるという危機感を覚え、とりあえずの現況を把握する必要があるということで調査をはじめた。調査は金沢から津幡にかけての計85カ所で、池の形状(自然のままの土手、コンクリート、ゴムシートなど)、生物の種類、ブラックバスの有無、水草類、周辺の植物をその内容とした。

調査の結果、津幡では4面が自然のままの土手となっている自然の池が多く残っていた。多くがコンクリートやゴムシート張りとなっており、特に深いすり鉢状のため池は水際の植物が生えにくい環境となっていた。

確認できた生物は、魚ではメダカが5カ所、ドジョウが5カ所、ハゼ・ヨシノボリ類が6カ所をはじめとし、タニシ、カワニナ、カラスガイ、モエビ、スジエビ、サワガニ、ザリガニ、タイリクバラタナゴ、モツゴ、ヨコエビなども確認された。

両生類ではアマガエル、アズマヒキガエル、トノサマガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、ツチガエル、ヒキガエル、モリアオガエルなどで、トノサマガエルは11カ所で、外来種のウシガエルは5カ所で確認された。また、クロサンショウウオが5カ所で確認された。

昆虫では、タイコウチが7カ所、マツモムシが5カ所、イトトンボが35カ所で確認された。トンボ類ではギンヤンマが33カ所で、コシアキトンボが21カ所で、全部で30種類近くのトンボ類が確認できた。

「加賀地域の身近な自然の現状と保全」

水草ではヒシ、コウホネ、オモダカ、サジオモダカ、サンカクイ、ヒツジグサ、キクモ、ジュンサイなど20種類ほどの植物が確認できた。

今後、これらの調査をもとに調査方法などを今一度検討して、詳細な調査をすすめていきたい。

白井伸和さん(地域植物研究会)

「金沢近郊の猛禽類について」

金沢近郊に生息する4種類の猛禽類(オオタカ、ミサゴ、サシバ、ハチクマ)について、生息状況の調査を行っている。ここ7年ほど調査をしてきて、いくつかのことがわかってきた。

オオタカは金沢近郊には5~8のつがい断続的に生息している。生息地は営巣に適した森林との結びつきが強く、また近くに果樹園や伐採跡など中型の鳥類やほ乳類を捕食する開けた狩場がある場所が好まれる。最近、4年間で確認できた3つがい7例のうち、巣立ったのは3例で、開発があるような場所では途中で失敗しているようである。

オオタカに比べると比較的数が多いサシバは、ペアの行動圏が、隣接ペアとの距離が1.5km前後くらいで並んでいることが多い。金沢近郊ではかなり市街地に近いところでも営巣しているが、開発が進んでいるところでは、サシバの生息は営巣は確認されなくなってきており、身近な自然を考える上で、サシバは1つのテーマであると考えられる。

魚を主食とするミサゴは河北潟を中心にした丘陵地で営巣している。営巣している数はトータルで、横這いかだんだん増えてきており、少なくとも環境が悪化している感じではない。特に金沢の市街地にかなり近いエリアで、山が深く、人がほとんど寄り付かないようなかなり深い谷がある地域では、集中して営巣している。また、野田山の裏あたりでは、標高260mとかなり高いところに営巣おり、採餌場所は犀川や浅野川などの川やダム湖であるようで、潟だけでなくため池や山間地のダムでも採餌しているのが観察された。

永坂正夫(金沢星稜大学)

「河北潟西部承水路の植生について」

河北潟西部承水路の水生植生の観察を1995年から2002年にかけて行った。その結果、1995年頃を境に急速に水生植物が変化をしていることがわかった。

まず1995年以前に調査された資料をみると、1970年代では、ヒシ、アサザ、トチカガミが優占し、ヨシなどは見られなかった。

1995年に西部承水路において水面に対して優占種は何かを調べた結果、かなりの場所で水生植物が生育しており、上流部はヒシで、下流部はアサザが優占していた。ところがその後、ヒシ、アサザは隙間に残存する程度で、それまでに数が少なかったトチカガミが優占種となった。さらに1997年以降、それまで優占種のトチカガミが少なくなり、北米原産の外来種であるチクゴスズメノヒエが優占し、ホテイアオイも生えてきて、その後だんだん面積を大きくしている状態にある。

2002年の調査では、ホテイアオイが大発生し、チクゴスズメノヒエも多く被覆しており、トチカガミやアサザはほとんどない状態となっている。

このように植生が急速に交代した背景には、承水路の土砂堆積速度が大きいこと、承水路は人の手がいり攪乱の度合いが大きい場所であるため、攪乱された場所を好み浅い湿地でも生育可能なホテイアオイやチクゴスズメノヒエが優占種となったと考えられる。

(事務局 草光紀子)



パネリストの方々。

.....



石川県でもビオトープの活動が活発になってきました。良好な自然環境が少なくなる中で、できるだけ早く自然を復元したいという願いは切実です。しかし、自然には自然の都合があります。自然の時間を無視して復元を焦ると、めざすべき方向とは相反する結果をもたらすこととなります。

生育している動植物を移し替える「移植」という手段は、自然再生を願う人々にとって、復元の手取り早い方法として魅力的です。実際、ほとんどのビオトープの造成において動植物の移植が検討されます。学校ビオトープでは、授業のサイクルが1年であるということもあり、観察のために植物の移植やメダカの放流が推奨されます。移植には注意が必要なことは、既に多くの文献等で指摘されており、良く検討された移植事例もあるのですが、一方で、問題の多い事例もまだ多くみられます。そこで、私が経験したいくつかの事例をもとに、移植の問題について考えたいと思います。

根本的な問題点

まず、「移植の問題点」について簡単に整理してみるとおおよそ次の2つに分けられます。

移植をする事自体が人為的な行為であり、野生生物群集をかく乱する要因となる。地域の他の生物や種内の遺伝的多様性に影響を与える。

実際には、移植は成功しないことが多い。とくに脆弱な希少種などは、1～2年は定着したように見えても、3～4年となると消失してしまうことが多い。一方、移植がうまくいく種は、定着性が強く、移植しないでも自然に増える。

多くの生態学者が移植に消極的なのは、主に理由によるのですが、実は移植を成功させることの難しさを良く知っているからでもあります。また移植を行う場合には、必ずその元となる生物が必要であることも問題です。とくに移植元として人工増殖した個体ではなく、野生の個体群が利用される場合には、現存する個体群に負荷がかかるため、場合によっては、野外生態系へマイナスの影響があることを考慮しなければなりません。

問題のある事例の特徴

移植の事例の多くが、成功例として喧伝されていますが、実際には、移植の成功を示す科学的根拠がない場合がほとんどです。科学的検証を行っていない例や、もともと検証の行いようのない事例が多く

みられます。私がみる限りでは、ほんとうの成功例はわずかしかなかった。それでもなお移植が推奨される背景には、個々の移植の事例についてきちんとした分析・評価が行われていないことがあると思われれます。そこで、実際に実施されている問題のある移植についてみてみます。

1) 野生種が生息する場所に移植する

既に周辺に移植しようとする種が生息しているのにも関わらず、同種を移植した場合には、移植の成果は検証不可能です。また移植の意義も見だしにくいものですが、実際にはこのような移植は案外多く実施されています。

また、開発等の改変予定地に生息する個体を保護する目的で、既に同種が生息している別の場所に採取した個体を移す行為も良くおこなわれます。善意の心情は良く理解できますが、移植された場所の収容力に限界がある場合には問題です。このことは、定員いっぱいのアパートにさらに新たな住人を住ませること、あるいは満員電車に詰め込まれる自分を想像することにより理解できます。



2) 移植前後で調査をしていない

小規模で行われる移植ではよくある例です。また、移植後の長期間のモニタリングについては、公共事業等でもほとんど行われません。この場合は、科学的に移植の成果を評価できるデータそのものがないということになります。

また、移植実施後の短期間のモニタリングでは定着が確認されている場合でも、その後数年経ってみてみると生息が確認できない例は良くあります。実は、私が手がけた最初のビオトープでも、希少植物の定着を表明した2年後に消滅してしまったことがありました。しかしこれは、モニタリングを継続していたからこそ、失敗を確認することができた少数の事例です。また長期間の観察で、個体の生存や繁殖の証拠が得られたとしても、継続的に個体群を維



持できる程度の繁殖が行われていなければ、移植が成功したとはいえません。

3) もともと無理がある場合

生活史の一時期だけしか生きられない移植が行われる場合があります。回遊する淡水魚や陸と水域を行き来する両生類など、生活史の中で生息環境を変える生物の場合は、移植時の生活段階において必要とされる環境だけでなく、一生を通じた生息環境が保障されることが必要です。

また、本来の生息環境とはかけ離れている場所に、無理矢理移植する場合もたまたに見受けられます。たとえば、ゲンジボタルは河川中流域の農業用水路や谷内の細流などに見られる種ですから、河口域に近い場所に放流してホタルの里をつくらうというような取り組みには、基本的に無理があります。人間に例えてみれば強制移住のようなことです。住みなれた我が家を追い立てられ、知らない土地に放り出されたあげく、そこが劣悪な環境であったりするわけです。

また、移植の実績のない種を実験的な段階を経ずに移植する場合がよく見られますが、強引で非科学的なやり方です。



移植したい気持ち

生態学を学んだ人間であれば、移植に対して慎重なのは当然のことですが、それでも自分が計画したビオトープには、できるだけ早く多様な生物に住みついてもらいたいと願います。ですから多くの熱心な方々が、愛着のあるビオトープに生物を増やしたいと思うのは当然で、移植への衝動に駆られる気持ちはよくわかります。しかしあえて、移植がしたくなる気持ちの中にある問題点を整理してみると、以下の3点があるのではないかと思います。

1) 移植それ自体が目的となっている

移植の行為そのものに意味を見いだしていて、移植のもたらす結果については関心が薄い場合があります。この場合、植物を植えたり魚を放したりという自らの手足を使う行為そのものが、自然保護に貢

献したという満足感につながっているようです。自己満足が悪いとはいえませんが、本当に野生の保全につながる行為かは疑問です。

2) 自然保護に対する勘違いがある

生態学者が無理な移植と感じられる事例でも、さまざまなメディアでは、すばらしい保全活動として取りあげられます。こうした影響が、移植が「自然に優しい」行為であると思われがちですが、本質的には野生への人為的な介入であり、「優しい」というのは全くの勘違いです。たとえ希少種の保全対策であっても、あくまで次善の策に過ぎません。

3) 特定の種だけを守ろうとする

善意から特定の種を守ろうとして他種を排除する行為も時折みられますが、人為的に天敵を排除することは、本来不自然な行為です。外来種は特別としても、どのような種でも地域生物群集のなかで成り立っていることを理解する必要があります。

重要な生息環境の保全

たしかに野生生物の生息環境が著しく劣化している今日においては復元は重要であり、その際、移植が復元を担う有効な手段となる場合もあります。しかし、移植を行わなくても少しだけ環境を整備することで、対象とする種の生息が可能となる場合もあります。

石川県においては、平野部において自然環境の著しい衰退の傾向がみられるものの、すぐれた環境要素はまだ多く残っています。野生生物を保全するためには、移植よりもいま残っている生息環境をこれ以上破壊しないことが最優先されるべきです。同時に、生息環境の破壊が進んでいる現状では、移植を第一義とする復元を唱えても説得力に欠けます。生息環境が劣悪なままでの移植は、種のソースを単に浪費するだけであり、復元とは無縁です。

野生生物と生息環境を復元するには、たとえば水域においては護岸の形状を垂直なものからゆるやかなものへ変える、水路のコンクリート化を止めるなどの対策が第一に求められます。また里山であれば雑木林の保全などの管理に関わる対策が重要でしょう。絶滅のおそれのある生物の系統保全などの緊急措置や、啓蒙を目的とする場合を除いて、野外に特別な移植用の施設をつくることは、石川県内では基本的には必要ないものと思われれます。

(高橋 久)

私たちの身近にある森林には多種多様な生き物が棲み、生き物たちのあいだにあるさまざまな相互作用が複雑にからみあっています。そのうち果実とそれを食べて種子を運ぶ鳥の共生的な関係(鳥による種子散布)は、豊かな生物群集の構築に重要とされています。我が国の森林では結実が秋から冬に集中し、それに対応して果実食の渡り鳥の飛来がみられます。しかし年によって果実の豊凶が起ることや渡り鳥の飛来数が違うことが経験的に知られていながら、渡り鳥の移動や南下が果実の分布や成熟のタイミングによって左右されるのかについて科学的な検証に耐えるデータはありません。その実態を把握するためにはまず、より多くの地域でデータを集めて比較していくことが必要です。

2001年冬、研究者が中心となって全国規模で果実と渡り鳥のモニタリング調査(通称みのりネットワーク)が企画されました。「みのりネットワーク」は各調査地で共通マニュアルを用いることによって、果実量と鳥の数の季節変化・年変化における地域差を明らかにするものです。以下に、石川県で現在までに決定した調査地を併せてマニュアル内容を簡単に紹介します。

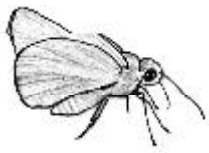
1. 調査地の設定:天然林、里山林などの二次林、公園などの植栽林(片野鴨池、白山山麓、普正寺の森、金沢城趾公園、金沢大学角間丘陵が調査予定地となっていますが、そのほか鹿島の森、錦城山、辰口付近、能登地域など石川県を網羅できるように調査地を広げていく予定です)
2. 調査期間:毎年9月~1月の第2週と第4週
3. 果実の調査:各植物種の5個体前後を調査対象とし、個体あたりの全果実数をカウント
4. 渡り鳥の調査:10の観察ポイントを決めて、各ポイントで5分間に観察される全ての鳥の種と個体数を記録(鳥類種の例)ヒヨドリ、ムクドリ、ツグミ、メジロ、ハシブトガラスなど

石川県の里山林は、多くの渡り鳥にとって、北陸地域における重要な渡り中継地であると予想されます。虫が少ない渡りの季節、果実は鳥にとって貴重な食料となります。渡り鳥は果実を食べて南へ移動していくと考えられますが、どの地域のどのような森林を餌の供給地として利用しているのか明らかではありません。森林にどれくらい果実があり、どれくらい渡り鳥が飛来して果実を食べるのか。まずは果実と鳥の種類と数量を一定期間記録しつづけることが重要な基本情報となります。

渡り鳥の動態は鳥に種子を運んでもらう植物の次世代づくりに貢献していることから、森林保全に有効なヒントを与えてくれます。森林の劣化などによる餌資源の不足は渡り鳥の飛来数を減少させ、それが鳥散布植物の繁殖成功を低下させて、さらに森林を劣化させる、といった負のフィードバックがかかることが懸念されます。森林の孤立化や人との関わり方など条件の異なる森林を比較し合うことで保全の方向性を模索することが可能でしょう。

今年4月から金沢大学が中心となり里山生物多様性観測年(SBOY)と銘打って、県下の里山の生物調査をおこなうことになりました。前号で同大学の田辺慎一氏が紹介しましたように、本調査は調査者・研究者・市民の里山活動ネットワークが骨格となりおこなわれます。里山林には日本の生物相の重要な位置を占める生物が共存していることから、生物多様性の調査は里山林の利用と保全の方向性を模索していく上で非常に重要です。さらに果実=餌資源、渡り鳥=種子散布者のように、里山林で植物と鳥が担っている役割に注目して生態系のしくみを明らかにする、言わば「里山林の健全さ」を評価することも今後の私たちの重要な目的のひとつであり、それを掲げて「みのりネットワーク」の構築を目指していきたいと考えています。





交流会メンバーの自己紹介コーナー

伏見川のサケの産卵シーンを見てみよう 杉木洋二



私の勤める金沢市立米泉小学校の横に伏見川が流れている。この川には毎年10月～11月半ばにかけてサケが上がって来て産卵している。時期になると毎日20匹前後のサケを見ることができる。雨が降り川の水が増水した後、たくさん遡上してくる。堰などの段差を越えやすいからである。私はこれまで大豆田大橋の下の河川敷で遡上しているサケは見たことはあったが、産卵シーンまでは見たことがなかった。だが昨年初めてサケの産卵シーンを見て大変感激した。まずメスのサケが尾びれで産卵する場所を掘る。その時オスは傍らで待機しながら泳いで待っており、産卵の時を待っている。でもよく見ると、オスの隙を窺っている別のサケが少し離れた所で泳いでいる。自然界は厳しいのである。カップルを優しく見守るなんて事はしないのだ。



産卵したサケはその後2週間位卵を守る為その場にいるが、やがて力つきて死に、川下へと流されていく。産卵した後のサケの尾びれは傷つき半分位白くなっている。それでもけなげに卵を守っているのである。サケは川を遡上開始した時から死ぬまで餌を採らないと言われている。空腹に耐えて懸命に子孫を残す努力をしているのである。

サケは本来ならば20km、30kmと遡上し上流まで行って産卵するはずであるが、河口からわずか5、6km位の大豆田や米泉あたりで産卵するのは伏流水があるからである。犀川や伏見川の川底には伏流水が出ているのである。音は「むっくり」と言われ市内のあちこちに出たいらしいが、今では少なくなってしまった。サケは伏流水が出て水温が一定の場所でないとは産卵しない。米泉のあたりは地名から分かるように、伏流水が沢山湧き出る所なのである。街中の川でサケが産卵するこの環境を、いつまでも大切に守って行きたいものである。

金沢市内の約10校あまりの小学校では10年以上に渡ってサケの飼育・放流事業を行っている。1校あたり300匹位のサケを飼育し、3月初旬に、

約5000匹位の稚魚を犀川、浅野川、伏見川、高橋川に放流している。我が米泉小学校も昨年からの事業に参加しており、5年生が総合的な学習の一環として大切に飼育し、成長の過程を記録して行っている。私自身はサケの飼育に6年あまり関わっているが、そのきっかけは伏見台小学校で学校ビオトープを作ることから始まった。

この事業のサケの卵は、美川町にある石川県水産総合センターから金沢市環境保全課が受精卵を分



けて貰って物である。水産総合センターで11月10日前後に人工受精させ、学校に来る時はすでに発眼している。観察している最中にクルッと動き回ることがある。12月20日前後に孵化し、その後1ヶ月あまりは何も食べず、自分の卵黄のみで育つ。この時の色が大変美しく、ルビー色の卵黄を付けて泳ぐさまは、大変愛らしい。

成長に伴い次第に赤い卵黄は小さくなっていき、やがて体内に吸収され見えなくなる。餌をやるのはこの後である。1日に6回位、休み時間の度人工飼料の餌をやる。餌は細粒、中粒、大粒と3種類有り、サケの成長に合わせて与える。

こうして手塩に掛けて育てた6～8cmのサケを3月初旬、学校の近くの川に放流する。放流の時サケが川の中へと泳ぎ出す瞬間、誰もが「元気で帰ってこいよ！」と小さな声でつぶやいている。

川に放流されたサケは少しずつ海に下っていき、河口に出たら体を海水に慣らし、やがて北洋の海へと泳いでいく。そして3、4年後産卵のため産まれた(放流した)川に戻ってくる。どんな旅をしてきたのか、戻ってきたサケに聞いてみたいものである。



今年の秋は是非ともサケの産卵シーンを、皆さんと一緒に見ましょう。

お知らせ

いしかわピオトープ交流会第3回総会議事録

開催日時 平成15年5月10日(土)13:30~14:00
 開催場所 こなん水辺公園管理学習棟
 司会進行 高橋 久 議事録作成者 川原奈苗
 参加者 22名 (以下、敬称略)

1. 会長挨拶

中村浩二会長により開会の挨拶がおこなわれた。
 司会は、高橋事務局長がおこなうことで了承された。

2. 議案の審議

議案1 活動報告と決算報告

高橋より会員数は5月9日現在51名であることが報告された。02年度の活動報告として、ニュースレターNo.2~No.4を各号500部ずつ発行し、会員と同時に金沢市の小中学校、県内のいくつかの施設に配布したこと、ピオトープ観察会を金沢城公園、能登島、河北潟の計3回実施したこと、また全労済から助成金をいただいて制作を進めていた「身近な自然 金沢近郊編」のパンフレットが現在印刷段階で、これまでに作成会議を3回、合同調査を5回実施したことが報告された。

ニュースレターは内容は充実してきているが、配布の方法や配布先を十分に検討していく必要があること、観察会は参加いただいた方からは好評であるが、いずれも参加人数が少ない状況であること、会員間の相互交流がすすめられるよう取り組みに工夫があることなど今後の課題についても報告された。

川原より02年度の決算報告がされた。

会計監査として野村幸平氏より、会計処理上の問題はないことが報告された。

議案2 活動計画案と予算案

高橋より、03年度活動方針は前年度の中身を充実させていくこととして、具体的には1)ニュースレターの2,3回の作成、配布先を検討して有効に活用されるようにすること、2)観察会は、金沢、能登、加賀地区の各地域1回ずつの開催を考えており、参加人数10名以上をめざすこと、3)ホームページの開設、とりあえずニュースレターなどが見られるようにし、プロパイダは県内でボランティアで提供している方の無料サイトを使わせていただく予定であること、3)助成金が得られて条件が整った場合に加賀編もしくは能登編の身近な自然パンフレットを作成すること、4)最新の名簿を作成するなど、会員間の意見交換が今以上にすすむように工夫していくこと。また会員60名以上をめざし、これまでいただいていた県からの助成金が今年度からなくなるので、今後企業等を中心に賛助会員を獲得してくような努力をしていくことが確認された。

川原より、03年度予算案が報告された。

質疑応答で、観察会の事前の下見など事務局で負担する交通費などは予算に入れたらどうかというご意見をいただいた。昨年まで県から助成金をいただいていたこともあり、多少予算に余裕があることから、状況を見てよろしければ予算に入れさせていただくことで、拍手で了承された。また、会員間の交流がすすむよう、名簿についてのご意見をいただき、専門分野などの情報が紹介された名簿にすることが決められた。

議案3 役員改選の件

これまでの体勢と同様ということで、拍手で承認された。

3 閉会の挨拶

事務局の草光紀子より閉会が宣言された。

2002年度決算

収入の部				支出の部					
項目	細目	内訳	小計	項目	細目	内訳	小計		
繰越金			¥33,407	通信費	切手代	80円×167枚	¥13,360		
会費	一般	1,000円×38	¥38,000			50円×20枚	¥1,000		
	団体	2,000円×3	¥6,000			10円×130枚	¥1,300		
	賛助	10,000円	¥10,000			50円×60枚	¥3,000		
	前納分	1,000円×5	¥5,000			官製はがき	50円×60枚	¥3,000	
補助金	補助金	88,000円	¥88,000			往復はがき	100円×60枚	¥6,000	
助成金	助成金	300,000円	¥300,000	印刷費	印刷機使用代	1,000円×1回	¥1,000		
雑収入	利息	4円	¥4	会議費	お茶菓子代	1,313円	¥1,313		
総収入			¥480,411			会議室使用代	1,710円×2	¥3,420	
						封筒	1317円	¥1,317	
						再生紙	1,136円	¥1,136	
						再生紙厚紙A3	12,285円	¥12,285	
						福利厚生費	保険代	1,000円×2	¥2,000
						リース料	施設レンタル代	7035円	¥7,035
						雑費	コピー代	420円	¥420
						印刷費	パンフレット	300,000円	¥300,000
						次年度繰越金		¥125,825	
						総支出		¥480,411	

2003年度予算

収入の部				支出の部					
項目	細目	内訳	小計	項目	細目	内訳	小計		
繰越金			¥125,825	通信費	切手代		¥20,000		
会費	一般	1,000円×60	¥60,000			90円×3×会員	¥16,000		
	団体	2,000円×4	¥8,000			官製はがき	50円×180枚	¥9,000	
	賛助	10,000円×2	¥20,000			宅急便	2,000円	¥2,000	
	前納分	1,000円×12	¥12,000	印刷費	印刷機使用代	1,000円×3回	¥3,000		
補助金	補助金	88,000円	¥88,000			インク代	900円×10	¥9,000	
助成金	助成金	300,000円	¥300,000	事務用品費	封筒		¥2,000		
雑収入			¥313,825			用紙	¥15,000		
						福利厚生費	保険代	3,000円	¥3,000
						会議費	総会開催費	35,000円	¥35,000
						観察会開催費	10,000円×3	¥30,000	
						雑費	事務局経費	20,000円	¥20,000
						次年度繰越金		¥149,825	
						総支出		¥313,825	

ホームページ開設されました!

6月からホームページを開設しました。これまでに開催された観察会、総会の情報や、ニュースレター、パンフレットが見られるようになっていきます。掲示板も使用できますので、会に対するご意見、ご質問、ピオトープに関する疑問など、自由に書いていただければと思います。またイベントの宣伝などにもぜひご活用ください。充実したHPづくりに、みなさまからの情報提供をお願いいたします。

ホームページ <http://biotop.yupapa.net/>

「身近な自然」No.5 夏号

2003年8月15日

発行所 いしかわピオトープ交流会

Email:biotopi@hotmail.com

<http://biotop.yupapa.net/>

事務局：〒920-0051 金沢市二口町八58

Tel.076-265-3323 Fax.076-265-3435

北陸水生生物研究センター 気付

